

2007年3月23日 第32回共同会議

エビに係る技術的検討の 成果について①

国立病院機構相模原病院
臨床研究センターアレルギー性疾患研究部長
海老澤 元宏

即時型食物アレルギー 全国モニタリング調査(平成17年)

国立病院機構 相模原病院 臨床研究センター
海老澤 元宏・今井 孝成

平成17年度 厚生労働科学研究費補助金 (免疫アレルギー予防・治療研究事業)

目的

わが国では世界に先駆けて、平成14年から食品衛生法アレルギー物質に関する表示が開始され、食物アレルギー患者の食生活の質の向上に寄与している。

食物アレルギーの原因食品は時代と共に変化していくことも考えられるので、わが国の即時型食物アレルギーの実態を経時的に追っていく必要がある。そこで、全国即時型食物アレルギーモニタリング調査を3年に1度行い、アレルギー物質を含む食品表示を適正化していく基礎的なデータとしている。

対象

原因食物を摂食後60分以内に何らかの症状が出現し、かつ医療機関を受診したもの

調査方法

日本小児アレルギー学会会員、日本アレルギー学会専門医に調査の主旨を手紙で説明し、調査協力を賛同を得た医師。

調査は、平成17年1月～12月の間、3ヶ月毎に葉書による郵送法で行った。協力医師は対象患者が来院する度に調査票に症例を集積する。

調査項目

従来の調査項目

名前(イニシャル)、性別、年齢または月齢、
原因抗原、臨床症状、
原因抗原CAP-RAST定量値、転帰、

新規調査項目

料理形態
初発/誤食区分

結果概要

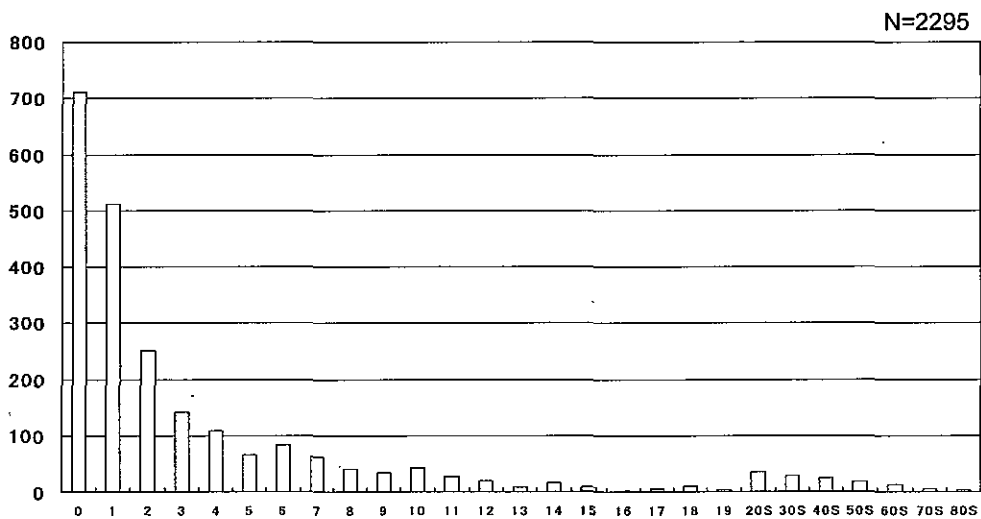
調査協力依頼者:4198名
有効回答 1510名(回収率36.0%)
調査協力賛同医師
1187名

結果概要

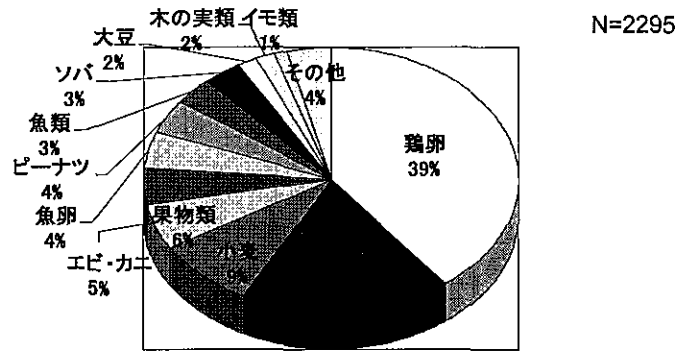
	第1回	第2回	第3回	第4回
期間	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月
返信	727	688	649	554
症例あり	282	294	265	175
症例	592	659	697	347
回収率(%)	61.0	58.0	54.6	46.7

合計2295名

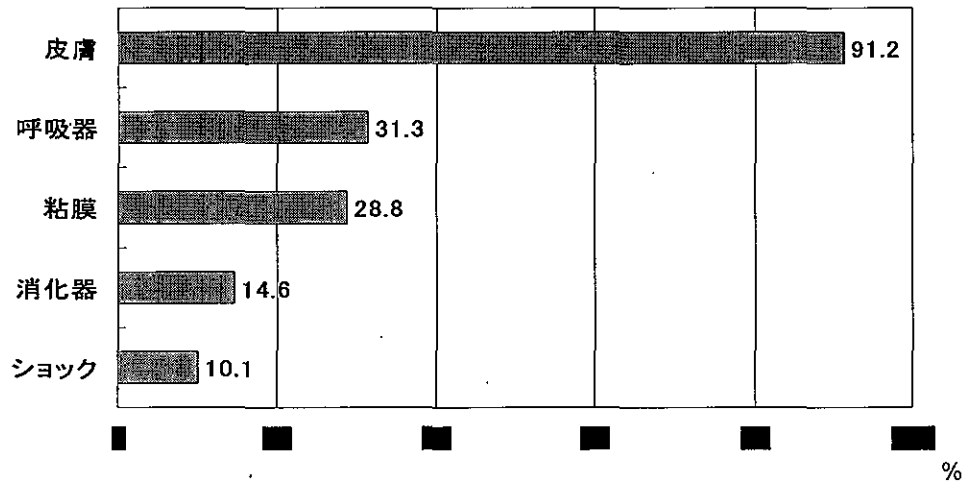
年齢分布



原因食物

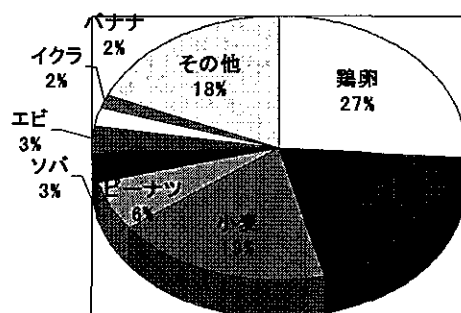


臓器別出現症状



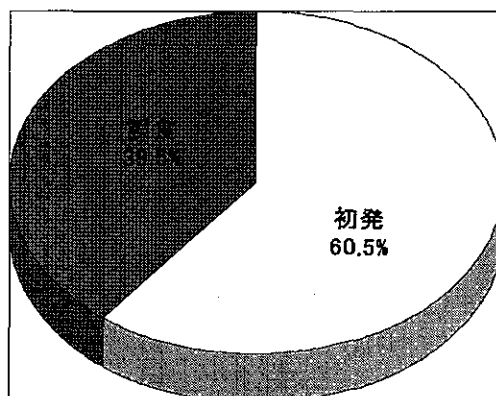
ショック原因食物

N=230

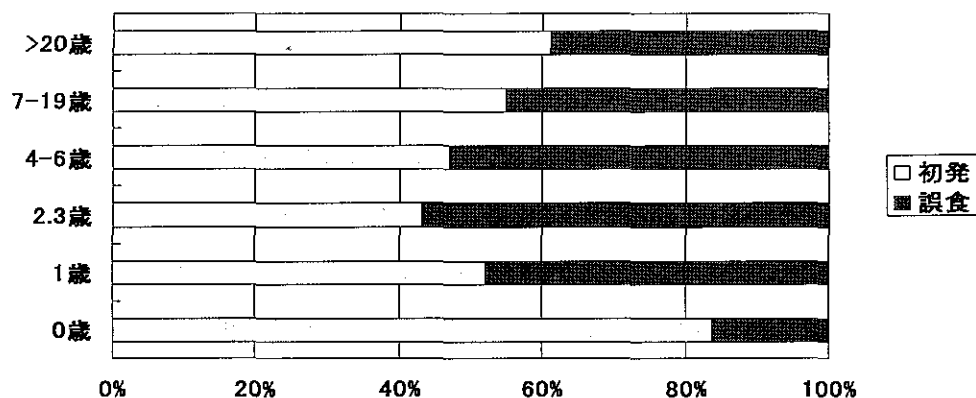


発症タイプ

N=2221



初発と誤食の割合



初発症例の原因食物

n = 1356

	0歳	1歳	2,3歳	4-6歳	7-19歳	20歳以上
No.1	鶏卵 59%	鶏卵 40%	鶏卵 22%	鶏卵 16%	エビ・カニ 21%	エビ・カニ 20%
No.2	乳製品 24%	魚卵 14%	魚卵 13%	果物類 14%	果物類 18%	小麦 18%
No.3	小麦 7%	乳製品 11%	乳製品 11%	ソバ 12%	鶏卵 16%	果物類 15%
No.4		ピーナツ 9%	ピーナツ 10%	魚卵 10%	ソバ 9%	魚類 11%
No.5		魚類 7%	ソバ 8%	エビ・カニ 8%	魚類 7%	鶏卵 7%
小計	90%	81%	64%	60%	71%	71%

誤食症例の原因食物

n = 879

	0歳	1歳	2,3歳	4-6歳	7-19歳	20歳以上
No.1	鶏卵 67%	鶏卵 48%	鶏卵 40%	鶏卵 31%	鶏卵 28%	エビ・カニ 小麦 26%
No.2	乳製品 17%	乳製品 29%	乳製品 27%	乳製品 29%	乳製品 16%	
No.3	小麦 10%	小麦 15%	小麦 11%	小麦 16%	小麦 ピーナツ 9%	果物類 ソバ 11%
No.4				ピーナツ 8%		
No.5						
小計	94%	92%	78%	84%	62%	74%

即時型食物アレルギー全国モニタリング調査 平成13,14年度、17年度の結果概要

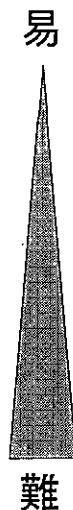
即時型食物アレルギー原因食物						アナフィラキシーショック症状を誘発した原因食物					
平成13,14年度			平成17年			平成13,14年度			平成17年		
No.	原因食物	度数	%	No.	原因食物	度数	%	No.	原因食物	度数	%
1	鶏卵	748	38.7	1	鶏卵	509	32.5	1	鶏卵	159	22.8
2	乳製品	616	29.9	2	乳製品	418	26.2	2	乳製品	93	13.3
3	小麦	375	18.2	3	小麦	199	12.5	3	小麦	33	4.7
4	ソバ	178	8.6	4	イクラ	103	6.5	4	ソバ	28	4.0
5	エビ	161	7.8	5	ピーナツ	85	5.3	5	ピーナツ	18	2.6
6	ピーナツ	118	5.8	6	大豆	73	4.6	6	エビ	14	2.0
7	イクラ	87	4.2	7	ソバ	74	4.7	7	バナナ	8	1.1
8	大豆	76	3.7	8	キウイ	41	2.6	8	イクラ	5	0.7
9	キウイ	75	3.7	9	大豆	39	2.5	9	大豆	3	0.4
10	バナナ	42	2.0	10	カニ	31	1.9	10	バナナ	7	1.0
11	カニ	40	1.9	11	バナナ	28	1.8	11	カシューナッツ	4	0.6
12	豚肉	32	1.5	12	クルミ	25	1.6	12	クルミ	4	0.6
13	クルミ	32	1.5	13	マグロ	34	2.1	13	モモ	3	0.4
14	イカ	30	1.4	14	リンゴ	18	1.1	14	イカ	3	0.4
15	サバ	24	1.1	15	ヤマモモ	15	0.9	15	サケ	3	0.4
16	豚肉	23	1.1	16	モモ	10	0.6	16	リンゴ	3	0.4
17	サケ	22	1.0	17	メロン	8	0.5	17	クルミ	2	0.3
18	ゼラチン	18	0.8	18	コマクサ	9	0.6	18	豚肉	2	0.3
19	ヤマモモ	15	0.7	19	タイ	8	0.5	19	豚肉	2	0.3
20	モモ	14	0.6	20	イカ	8	0.5	20	サバ	1	0.1
21	メロン	13	0.6	21	サケ	8	0.5	21	ゼラチン	1	0.1
22	マグロ	13	0.6	22	ゼラチン	7	0.4	22	豚肉	1	0.1
23	牛乳	11	0.5	23	カシューナッツ	7	0.4	23	豚肉	1	0.1
24	コマクサ	11	0.5	24	アジ	7	0.4	24	豚肉	1	0.1
25	リンゴ	11	0.5	25	アジ	7	0.4	25	豚肉	1	0.1
26	アジ	10	0.5					26	豚肉	1	0.1
27	リンゴ	10	0.5					27	豚肉	1	0.1
28	アジ	10	0.5					28	豚肉	1	0.1
29	ホタテガイ	10	0.5					29	豚肉	1	0.1
小計 3492 90.0			小計 2132 93.8			合計 3551			合計 231		
フリ	6	0.2	豚肉	5	0.2	豚肉	0	0.0	アジ	0	0.0
オレシジ	4	0.1	鶏肉	5	0.2	メロン	0	0.0	イカ	0	0.0
アワビ	3	0.1	牛乳	4	0.2	カラ	0	0.0	オレシジ	0	0.0
マツタケ	0	0.0	アワビ	4	0.2	リンゴ	0	0.0	サケ	0	0.0
			サバ	3	0.1	アジ	0	0.0	サバ	0	0.0
			オレシジ	1	0.0	アジ	0	0.0	マツタケ	0	0.0
			マツタケ	1	0.0	オレシジ	0	0.0			
						マツタケ	0	0.0			

特定原材料5品目
特定原材料等20品目
それ以外

摂食形態の分類

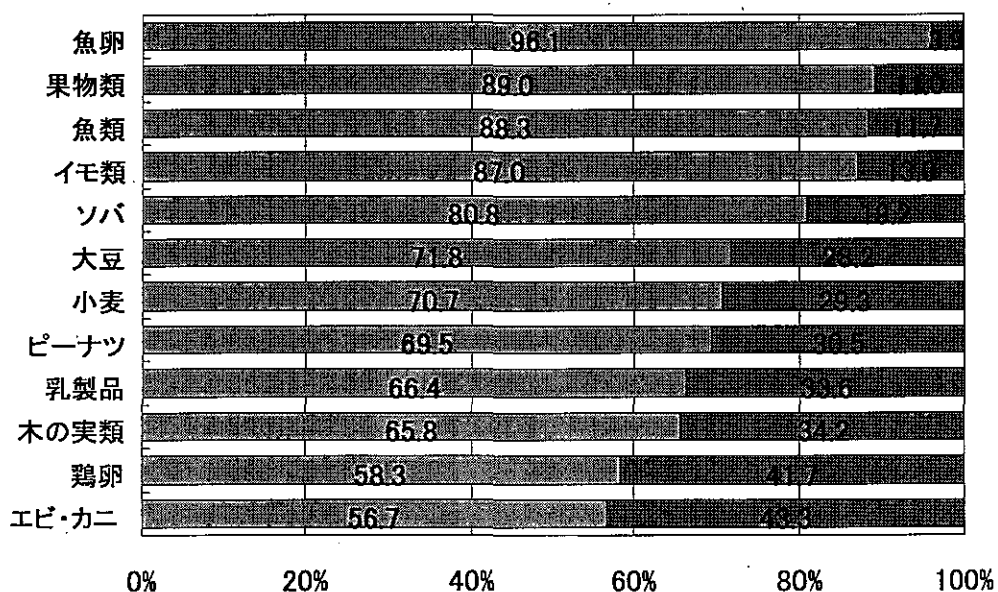
加工食品中の原因
食物の含有判別

- ① 原因食物そのもの
- ② 原因食物が外観や名称から容易に想像のつくもの
例: 玉子豆腐、牛乳プリンなど
- ③ 原因食物が外観や名称から想像のつくもの
例: ケーキ(鶏卵)、厚揚げ(大豆)など
- ④ それ以外



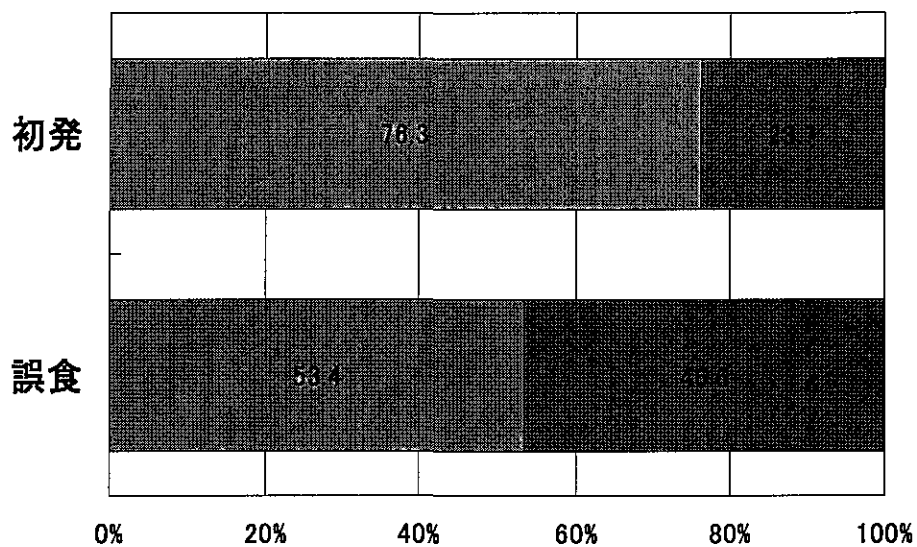
原因食品別の摂取形態の割合

■: 摂取形態①、②
■: 摂取形態③、④



発症機会別の摂取形態の割合

■：摂取形態①、②
■：摂取形態③、④



まとめ

- アレルギー物質を含む食品表示の妥当性が示された。
- エビ・カニは幼児期から成人期までの新規発症および成人での誤食の原因食物として重要である。
- 加工品へのより詳細な表示の必要性、誤食の防止策としてエビ・カニの表示を改善する必要があると考えられた。

日本における小児から成人の エビアレルギーの臨床像に関する検討

○富川盛光¹⁾、鈴木直仁²⁾、粒来崇博³⁾、伊藤節子⁴⁾、
柴田瑠美子⁵⁾、伊藤浩明⁶⁾、宇理須厚雄⁷⁾、海老澤元宏³⁾

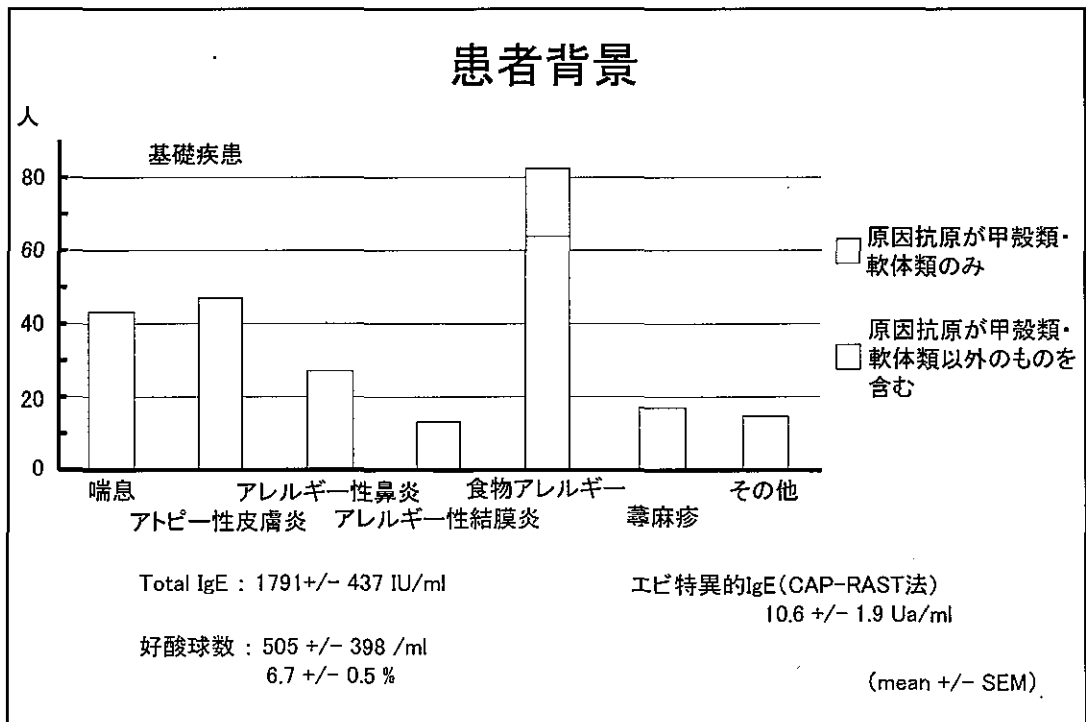
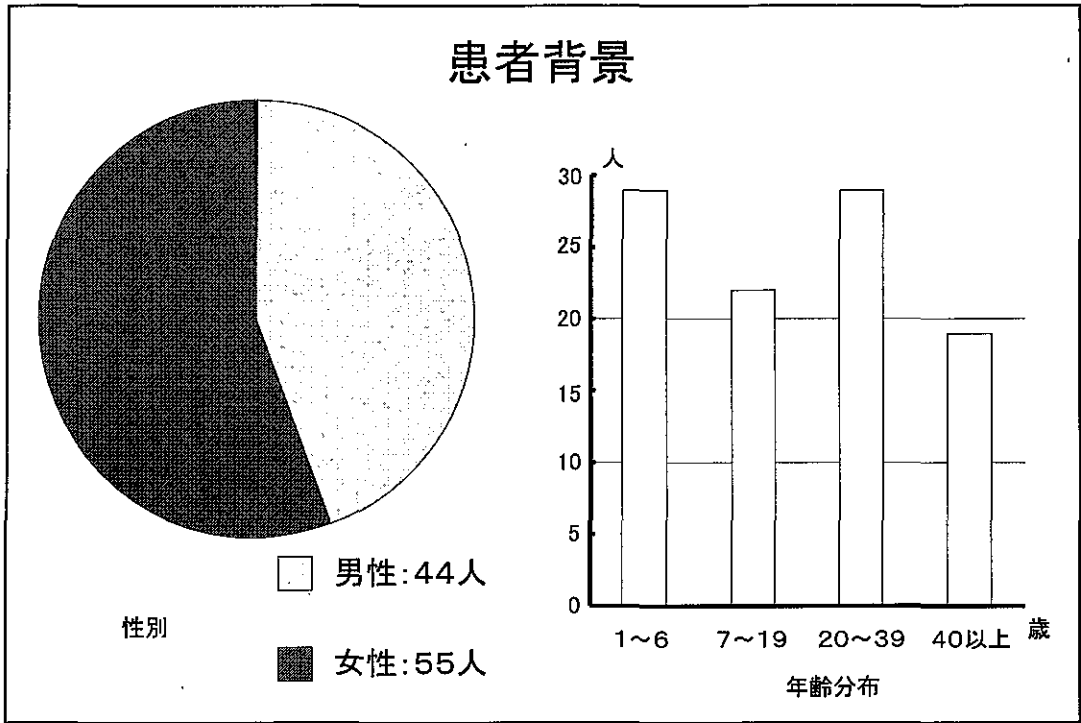
- 1) 国立病院機構 相模原病院 小児科
- 2) 同愛記念病院 アレルギー・呼吸器科
- 3) 国立病院機構 相模原病院 臨床研究センター
- 4) 同志社女子大学 生活科学部 食物栄養科学科
- 5) 国立病院機構 福岡病院 小児科
- 6) あいち小児保健医療総合センター アレルギー科
- 7) 藤田保健衛生大学 坂文種報徳會病院 小児科

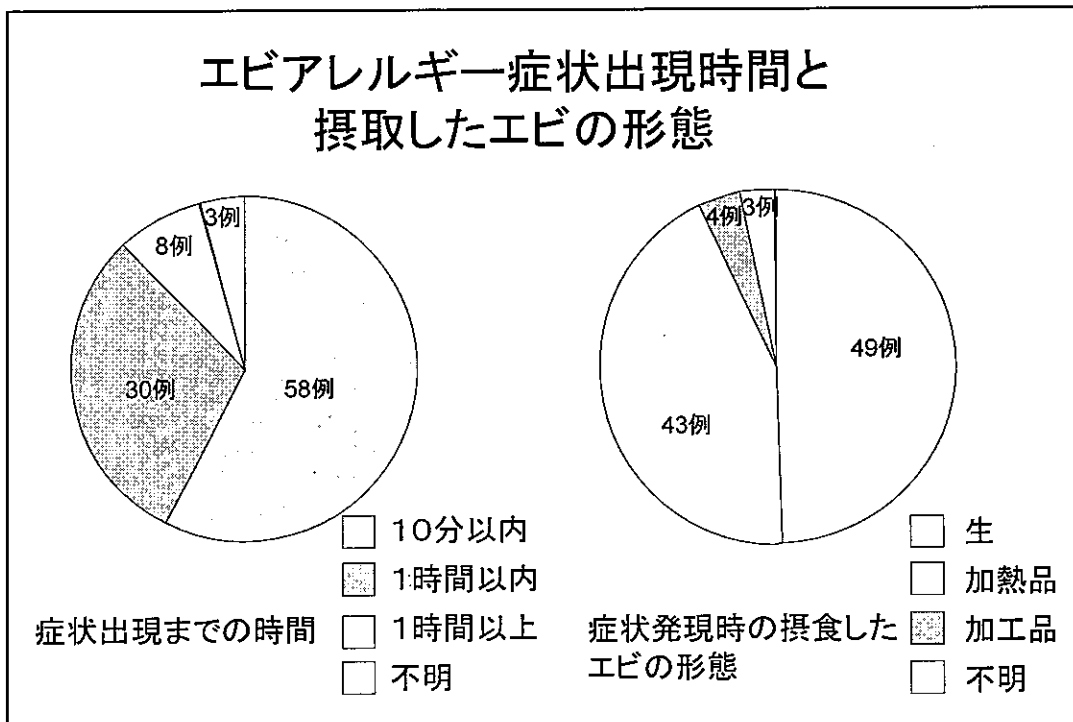
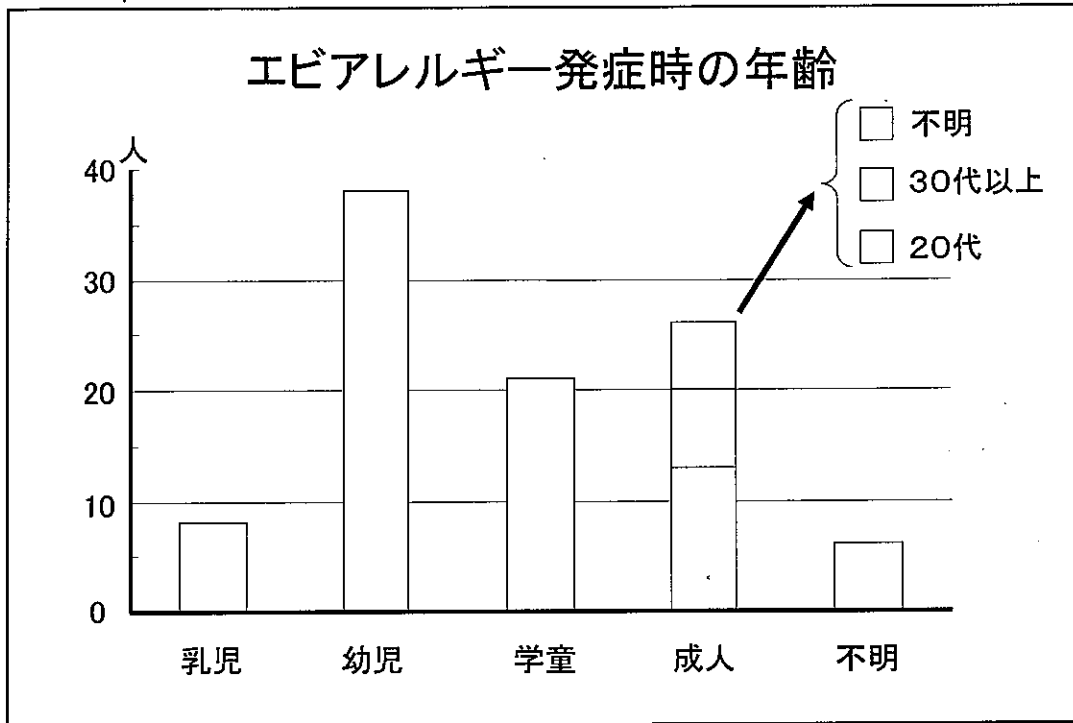
目的

エビ摂取による即時型アレルギーの臨床像を把握することと、他の甲殻類、軟体動物類の摂取による症状との関連を調べることを目的とした。

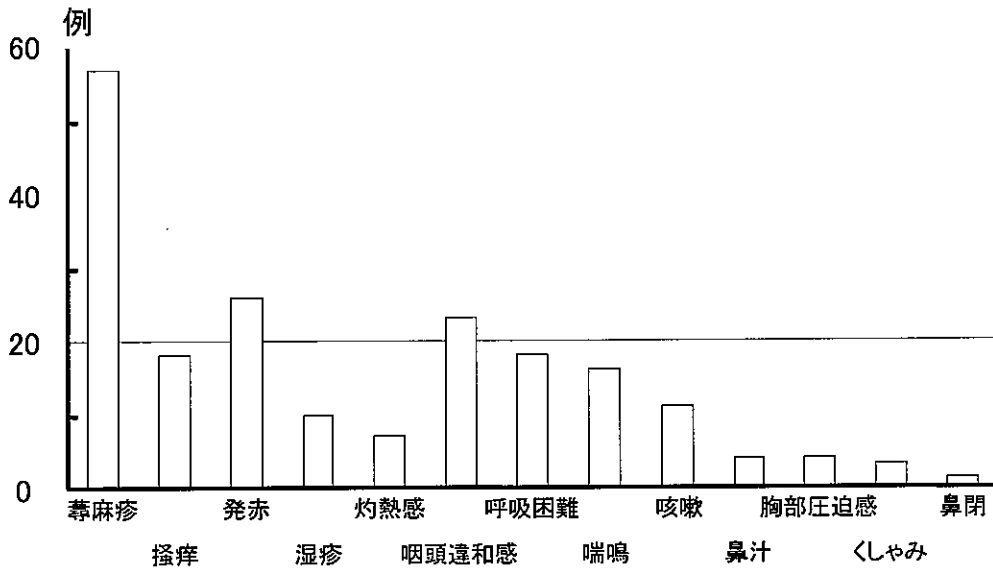
方法

質問紙を用い、平成16年12月から平成17年2月に関係協力機関に依頼し、エビを摂取して確実にアレルギー症状の出た症例を対象に調査を行った。

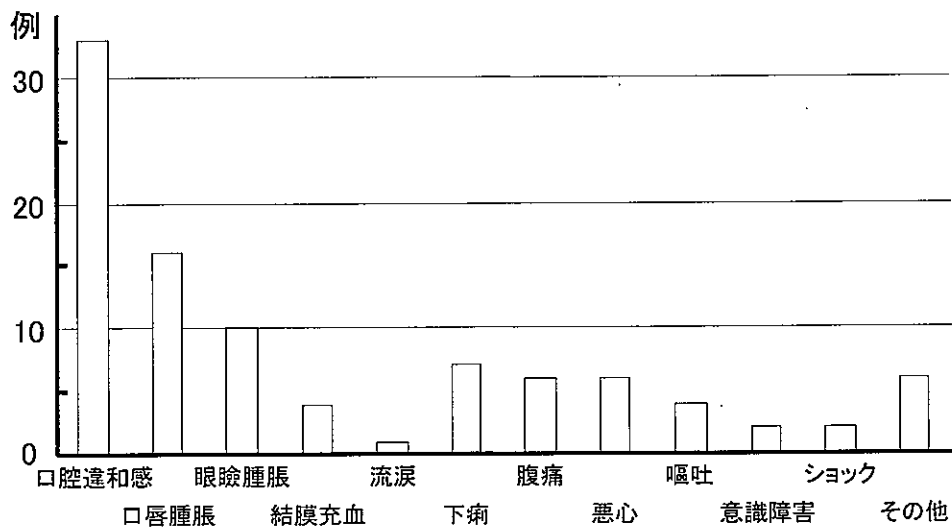




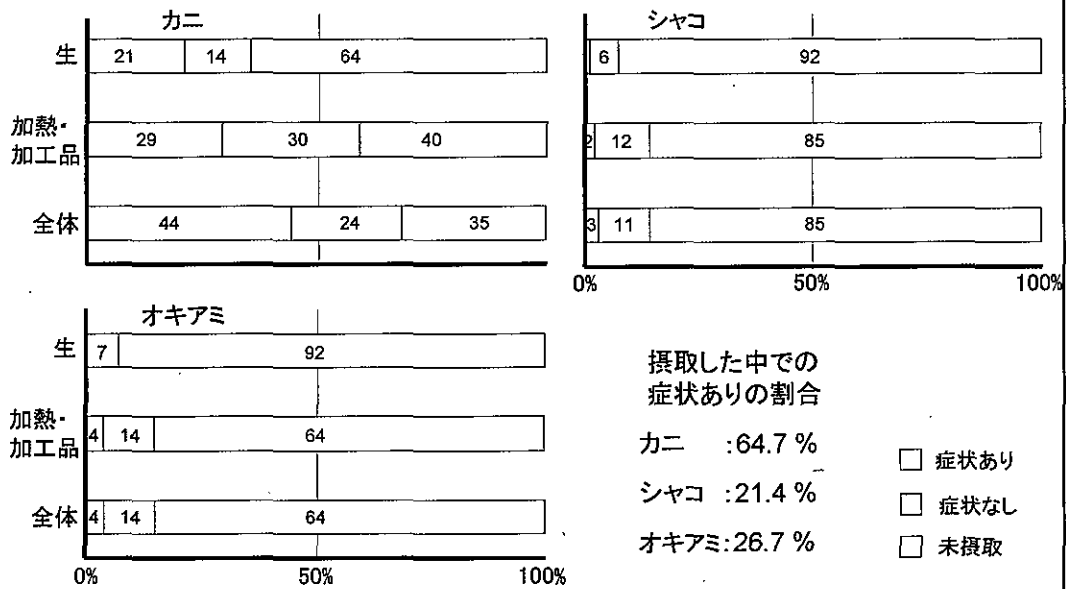
エビアレルギーの症状(皮膚症状・呼吸器症状)



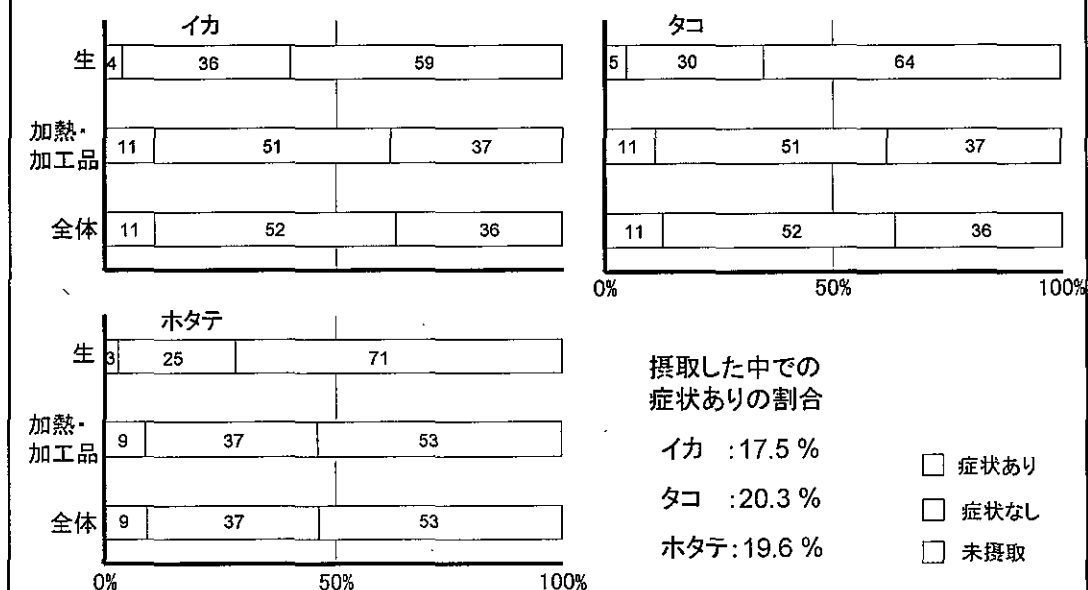
エビアレルギーの症状(皮膚・呼吸器以外の症状)



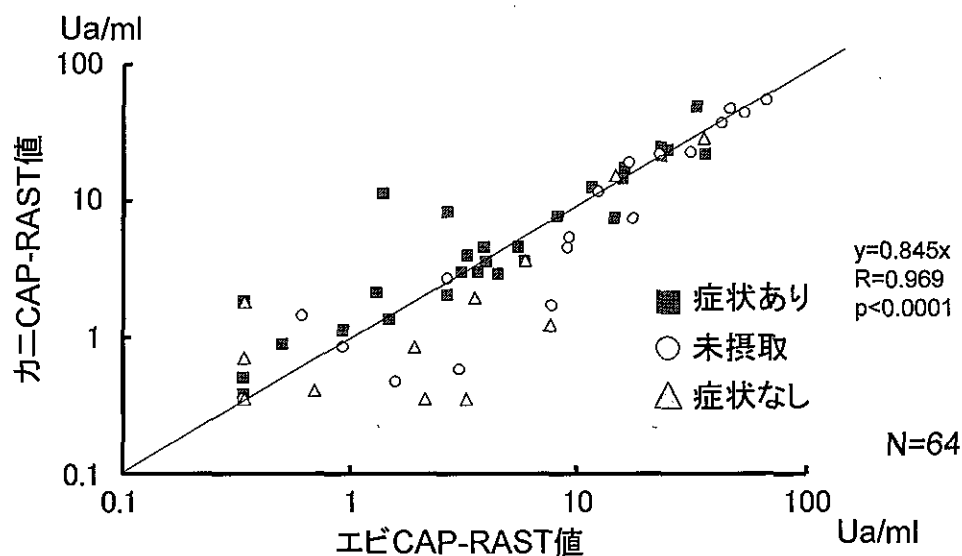
カニ・シャコ・オキアミで症状を呈した症例



イカ・タコ・ホタテで症状を呈した症例



エビとカニのCAP-RAST値の関係



まとめ

エビを摂取して症状を呈するヒトは何らかのアレルギー疾患を持っており、特に他の食物アレルギーを持つ人が多かった。

症状の出現時間は1時間以内がほとんどで即時型反応が多かった。

症状としては皮膚症状が最も多く何らかの皮膚症状を呈していたヒトは85人に及んだ。また、ショックや呼吸困難、意識障害などの生命に危険を及ぼす反応も認められた。

エビアレルギーが有り、カニを食べて症状がでるヒトの割合は64.7%と多く、イカやタコの軟体類では食べて症状が出るヒトは20%前後にとどまった。

軟体類もトロポミオシンを持ち、交差抗原性を示す場合もあるが、甲殻類と比べ摂取しての症状出現は少なく、臨床的に甲殻類とは一線を画す。